

独りぼっちの木

リブネ・オハッド

2014年12月1日

昔ある時独りぼっちの木が柱^すんでいました。新芽^{こども}の時からいつも一本暮らし^{いっほんぐ}で、友達も遊び相手もいなくて、気が滅^き入^{めい}って寂^{さび}しく日々を過ごしていました。

「あー」と思いました、「私が呑気物^{のんきもの}のタンポポだったら、私も毎日朝から晩まで花同士^{はなどうし}と一緒に揺ら揺らし、風が吹いたら成り行き任せにする。お気楽蜻蛉^{とんぼ}だったら、何も考えずに生き、美しくキラキラ飛び回る。いや、桜の木だったとしても、爺^{じい}さんに灰^まを撒^まいてもらえて綺麗に咲くかも知れない。けれど私はタンポポでもなく蜻蛉^{せいらん}でもなく桜でもない。ススキの様に^{しと}淑やかではなく、若草の様に柔らかくなく、うぐいすの様に^{びせい}美声^{かえで}がなく、楓の様に^{かえで}見事な紅葉^{もみじ}もないよ。私はただ地味な無花果^{いちじく}である。文字の言う通り、私には花がない。たまに果物が実^{みの}るけど、たいてい枯れ葉^{くわ}を散らかして朽ち葉^{くわ}だけになる。」と心の中で言って落胆^{らくたん}して枝^{えだ}を振りました。そうは言っても、風^{かぜ}だけだったかも知れません。

そして、独りぼっちの木の気^きが滅^{めい}入^いる日々が続^がっていました。元日^{がんじつ}が過ぎ、雛^{ひな}が飾^{かざ}られて消え、鯉^{こい}幟^{ぼり}も揚^あがって下がり、暑^{あつ}くなって涼^{ひや}くなりました。

秋になる頃、ある日の事です。そよ風が涼しく吹いていて、近いうちに寒^{ひや}くなってくだろうと言うわずかな気配^{きはい}があると思^{おも}っても、周りの景色^{けいしき}を見ると何も変わっていません。そこに、飛び近寄^{とび}る小鳥^{せうと}です。どこに行くか知っているどころか、どこにいるかも知らない様^{よう}で、フラフラ^{ふらふら}彷徨^{さまよ}っていました。小鳥^{せうと}は間もなく独りぼっちの木に気付^{きづ}いてそこに止^とまりました。

「あら、こんにちは。」と木^きが言^いいました。「元気なさそうですが、大丈夫なの？」

「あ、初^{はつ}めまして。いきなり現^{あらわ}れて迷惑^{めいわく}を掛^かけるのはすみません。実は、私は群^むれと離^{わか}れ離^{わか}れになって迷子^{まご}になっちゃったんです。ひょっとしてこの辺^へりを通^{とほ}る他の鳥^{とりの}を見^みませんでしたか、それともオーストラリアへの道^{みち}を教^{おし}えてもらえませんか？」と小鳥^{せうと}。

「ううん。他の鳥^{とりの}を何^{なん}羽^ぼか見^みましたが、群^むれじゃなかったのです。それから、私は木^きである為^{ため}にあまり動^{うご}き回^{まわ}っていないのです。残念^{ざんねん}ですが、オーストラリアへの道^{みち}は分かりません。」

「あ、そうなんです。まあ、仕^し方^{かた}がないなあ。皆^{みな}を探^{たず}ね続け^{つづ}けなきゃ行^いけないなあ。」

「あ、よろしければ、ここでもう少し休^{やす}んでもいいですわ。疲^{つか}れている様^{よう}だし。」

「えっ、本当にいいの？ ありがとう。」

「ええ、構^{かま}いません。皆^{みな}と会^あえるまでここに泊^{とど}まってもいいです。あ、う、ちょっとお聞^ききたいのですが、飛^とぶと言^いうのはどうですか？ オーストラリアはどんな所^{ところ}なの？」

「そうですね…飛ぶと言うのはね、空を渡ると、自分が風になった様な気持ちになって、自分が動くと言うより、動くのは世界の方で、どこにでも行けると感じる事です。でも、オーストラリアは全然分かりません。今はそこに初めて向かう所だからさ。鳥にとって、一度行った事がある所にはいつも戻る事ができるんですが、行った事がない所は別の話です。だからこそ群れと別れてしまって困ってるんです。」

こう言ってから、小鳥は早速仲間を探しに飛んで行きました。独りぼっちの木は小鳥が群れと会えるといいねと思いました。それにしてはなぜ分かりませんが、小鳥の飛び去っていく姿を見ていて微妙に悲しく感じました。それに、小鳥が夜クタクタに疲れて戻ったら、可哀想だねと思いつつ、ある所で心が静まりました。

それから、小鳥は連日、朝は仲間を探しに行き、夜は木に帰って、木は一晩中眠っている小鳥を見守ってくれました。小鳥は毎日いちじくの木に空からの眺めや様々な所の事を話しまして、いちじくの木は小鳥に土地に繋がっている事や世界のゆっくりとした、静かな話の事を話していました。

やがて寒くなって、小鳥はもう仲間と会えないと分かる様になりました。「おかえりなさい。」といちじくの木が言いました。けれども、今日小鳥は返事をしませんでした。「あら、なんか落ち込んでいるみたいね。気にしないで、あなたの仲間達は必ず探してくるし、すぐに会えるよ。」

「いいえ。もう何日間も探してきて、自分の群れだけじゃなくて、同じ一類の他の鳥さえも見付けられない。これはきっと、皆がもうオーストラリアに行ってしまったと言う事だ。」

「でも仲間を置いていく訳ないでしょ？」

「君には解からないよ。数日は待つかも知れないけど、いつまでも待つ訳がないよ。南へ行くのはここが寒くなるから。いつもあそこは暖かいと言われたけど、今まで意味が解からなかった。」

「本当にそんなに寒いのか？ 私、いつも秋と冬は平気だったのに。」

「木から大丈夫だろう。私はこんなに寒い天気は初めてだし。しかも、あの空から濡らす水…」

「雨」

「そうそう、あの雨はひどいよ。もう他の鳥と一緒にいけないし、一羽でなんかとても行けない。それで、ここに泊まるのは群れと会えるまでだけだったけど、冬と一緒に過ごしてくれない？」

「えっ、私と？ でも、私は淑やかじゃないわ。」

「でも、丈夫なんだ。風で揺動かされないよ。安全に巣が作れる。」

「でも、私は綺麗な花がない。」

「冬は花より実用性だよ。果物が実るでしょ？」

「でも、私は葉っぱが醜いし。」

「広い葉っぱなのよ。雨が降ったら屋根になりそうよ。とりあえず、私が今までお世話になったのは君は一度も文句しなくて、いつも頼りになる友達だった。そんな事で判断なんてしないよ。」

「まあ、この不束物の私でもいいなら、もちろん喜んで。」

しばらくして、冬が来ました。小鳥を風や雨から匿う為に、いちじくの木が精一杯の努力をしてくれました。そしてついに暖かくなって春がやってきました。

どこを見ても花が咲いて、小さい動物が地面を走って行って、虫も空中をザワザワとしていき、世界は活力が溢れている様でした。小鳥ももう寒がらなくて元気になった様でした。ところが、いちじくの木は少しずつ不安そうになりました。

「もう寒くなく、雨も激しく降らないみたいね。」と言いました。

「ああ、そうだね、もう一度周りを飛んで行ける。行ってみたいなあ。」

「うん。一面中は綺麗な花が咲き、いい匂いもしているし…」

「本当だね。じゃあ、この新しい景色を見に行く。」と小鳥は言って飛び出しました。小鳥の飛び去っていくのを見送って、木が葉を一枚散らしました。でも日が暮れ掛かると、小鳥は戻って来ました。ワクワクして見た事を木と話し始めました。ですが、

「あ、でも私はそんなに綺麗な花も、いい匂いもない。あなたがもうここにいる理由はない。」

「こっちはもう家の様になったんだ。どこにも行くつもりはない。」

やがてもっと暖かくなって、地平線に時々鳥の群れが見かけられる様になりました。こう言う時、小鳥はいつもそこへ向かって飛びました。そして、ある日、もう戻って来ませんでした。木は一日間待ち、二日間も待ちました。小鳥は怪我とかしちやったの？ もしくは捕食者に遭っちゃったの？ など心配しました。だがどれくらい待っても、小鳥は現れませんでした。

雛が飾られて消え、鯉轆も揚がって下がり、暑くなって涼しくなりました。小鳥の帰りを待ち続け、ひとりぼっちの木にはその年果物が一個も実りませんでした。冬には、葉を全部枯らせて散らかして朽ち葉になりました。

もう一度春になりました。世界は活力が溢れている様でしたが、ひとりぼっちの木は無気力で落ち込んでいました。それにも関わらず、どこを見ても花が咲いて、小さい動物が地面を走って行って、虫も空中をザワザワとしていっていました。そこに、飛び近寄る小鳥です。とは言え、よく見ると一羽だけじゃなく、数羽もいました。小鳥達は間もなくひとりぼっちの木に着いてそこに止まりました。

「小鳥？ ある日いきなり消えて、何があったか分からなかったの。」

「すまない。あの時突然仲間達に出会った。今度見失ったら一年中離れて、会う機会がなくなると分かってたんだ。戻って知らせる時間もなかった。それから北の実家に行って、毎日が忙しかったんだ。」

「じゃあ、今日も実家に帰って行くの？ それを告げる為に来たのか？」

「違うよ。今年群れの皆と一緒にオーストラリアに行ったから、もう一羽でも行けるんだ。ここに新しい群れ、自分の家族、を作るつもりで来たんだ。」

「新しい群れなの？」

「そうだ。北へ行った時、こちらの鳥と付き合い始めて、いつも雛鳥育てをしていたんだ。だから忙しかったと言った。」

「それで、ここに生きたいの？」

「うん。家族に君の事を話したら、皆が来るのが張り切っていたよ。よかったら、ここに巣を作って、ここから秋になると南へ出かけて、ここに春になると帰って来る。これはどう？」

木は嬉しくてはいと言いました。それから、小鳥の家族はいちじくの木に棲んで、毎年どんどん増えていきました。いつも移動してから、小鳥は遠い所の話一杯で帰って来て、雛鳥は枝の間で飛び遊んでいました。そしていちじくの木は

もう独りぼっちではありませんでした。

お仕舞い